



意

見

陳

述

控訴人 在田一則
在田一則と申します。2005年3月の定年退職まで北海道大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻において地質学の教育とヒマラヤ・日高山脈の地質学的研究に従事し、現在は一般社団法人北海道自然保護協会の会長を行っています。

ここでは、地質学を学び研究してきた立場から核エネルギーおよび原子力発電所についての私の考え方を述べます。また自然保護から見た原発についても一言触れます。

我が国は、1945年の広島・長崎への原子爆弾投下による凄惨な被曝体験、そして1954年のマーシャル諸島ビキニ環礁での米国の水素爆弾実験による第五福竜丸乗組員の被曝と三度の放射線被曝を経験しました。もちろん、その他にも各国の原水爆実験地周辺には多くの放射線被曝者がおりますことは

私が高校に入学した1957年に茨城県東海村で研究用原子炉の火が灯つたことは、当時のソ連が打ち上げた世界最初の人工衛星スプートニクのニュー・スとともによく記憶しております。これからは原子力平和利用そして宇宙開発の時代が始まるのだと子供心に実感し、人類の明るい未来を感じたのを覚えております。

三度の被曝体験は原水爆の実験禁止そして廃止を求める国内外の運動となり日本原水爆被害者団体協議会は「核兵器使用のタブーの確立」に多大な貢献をしたと認められ、今年度のノーベル平和賞を受賞することになりました。

語つまでもありません。そして2011年3月11日には福島第一原子力発電所事故による四度目の被曝と放射能汚染を体験し、その影響は多くの避難民への対応、放射性物質に汚染された膨大な廃棄物の処理問題、汚染水の海洋放出、そして廃炉など、多くの問題点が今後も長期間にわたって続きます。

三度の被曝体験は原水爆の実験禁止そして廃止を求める国内外の運動となり日本原水爆被害者団体協議会は「核兵器使用のタブーの確立」に多大な貢献をしたと認められ、今年度のノーベル平和賞を受賞することになりました。

私はその後、北大において地質学を学び、日本は地球上最大の大陸であるヨーロッパ大陸と最大の海洋である太平洋の境界にあること、さらにプレートテク

トニクス理論の出現により、日本が世界でもっとも火山や地震が多いことの理由は太平洋プレートがユーラシア大陸の下に沈み込んでいることにあると学び、また自身の研究からもそうであることを確信しました。

2023年10月30日に、300名余りの地球科学の専門家が、現在日本で進められている高レベル放射性廃棄物の処理問題について、「世界最大級の変動帯の日本に、地層処分の適地はない」との意見を表明しました。私はその声明の呼びかけ人となりましたが、それは私の地質学者としての体験からです。声明では、2012年9月の日本学術会議の原子力委員長への回答「高レベル放射性廃棄物の処分について」で提案されている「暫定保管および総量管理を柱とした政策枠組みの再構築」に賛同しています。このでの総量管理とは、放射性廃棄物の量をこれ以上増やさないために、厳しく規制管理することです。つまり、原子力発電所をこれ以上増やさないということです。この意味でも私は泊原子力発電所の再稼働に強く反対いたします。

世代間倫理は、端的にいって、木材が必要だからと言って森林を伐採し、未来の世代が必要な分までを切つてしまつても良いのかという問題、つまり未来世代に対する倫理です。世代間倫理は、環境問題のみならず、いろいろな問題で重要な考え方ですが、原発問題についても言えます。原発が出すいわゆる核廃棄物の処理问题是原発発足の当初から言われていますが、いまだに解決の糸口もありません。我々が享受している（あるいはさせられている）原発の恩恵のツケを未来の人たちに回すこと避けなければならないことは人間の倫理として当然のことだと思います。

このように、世代内倫理および世代間倫理の考え方からも、私は泊原子力発電所の再稼働に強く反対いたしました。